

## 〈「退職に寄せて」〉

### 退職にあたり

城南高校 伊 東 啓 祐

いよいよ退職を迎えることとなりました。定年が延長され中途半端に一年伸び、最後は何となく気持ちも半端なままの一年でした。教員生活三十八年、特に担当が書道に変わってちょうど三十年を振り返ってみて思ったことを綴ってみます。

最初の八年間の国語科教員時代に、「自分は愛を真顔で語ることができるので国語科の教員になった。中島みゆきの詩を高校生に語りたい。」という、ある国語科の教員の言葉を聞いて、自分は何のために教員になったのか、授業を通じ高校生に何を語りたいのかを考えていました。もちろん教科として教えなければならないことはたくさんありますが、それ以上に自分が教壇に立つ意義について、恥ずかしながら教員になって初めて考えていたなと思います。芸術科に移動し更にそのことを深く意識しました。書道を通じ高校生に何を伝えたいのか、紆余曲折を経ながら、その時々 の価値観の変化もあり、最後まで明確な答えは出なかったようです。

先日、最後の卒業式かなと感慨深げに式に参列した際、本校三年生が語った答辞の一節に深く心を打たれました。ここに紹介します。

しばしば「伝統」という言葉が使われます。私たちが先輩方から受け継ぎ、次の世代に繋がるなくてはならない「伝統」。私は、「伝統」の正体とは、「感動」だと思っています。誰かの全力は、誰かの心に「感動」をもたらし、その受け取った「感動」のエネルギーに突き動かされて、その誰かもまた、自らの全力を尽くす。「感動」は人から人へと、次々に伝播していき、いつしか、決して忘れたくない世代を超えた共

通の精神へと姿を変えていく。これが、「伝統」の姿なのではないでしょうか。

我々は「伝統文化」という「書道」を若い世代に伝えたいわけですが、彼の言う「感動」を伴い、その情熱を伝えきれているのかどうか。この感動を次の世代に伝播できるような授業をできたのだろうか。『誰かの全力は、誰かの心に「感動」をもたらし…』この答辞を聞き30年間の足跡が吹き飛んでいった気がしました。

前にどこかで書いた気がしますが、昨今、「働き方改革」という言葉が氾濫し、効率的を美とする風潮があり、昔よく聞いた「多少無理しても」「全力で」「一生懸命」が隅に追いやられてしまった感じがします。効率的に物事を進めることは大事なのではというが、結果的に達成目標を下げて時間内に終わらせることを優先してしまい、振り返ると何ら進歩せず、安易な妥協をしていないか。我々が目指すのは創作活動です。当然一朝一夕にできるものではなく、時間をかけ「反復」「何度も」「できるまで」と、たとえ時間がかかっても自分の目標を追い求めてきた頃があったと思います。「効率的に」しかし「じっくり」と物事をとらえていくことが大事かなと感じています。

最後に私からのお願いです。学校に書道の教員は基本ひとりです。学校にいる間は芸術家ではなく芸術科の教員です。まずは校内で自分の立ち位置をしっかりと確立し、その後外に出てきてください。校内外で、書道を愛する生徒たちが活躍できる場をしっかりと守り抜いてください。これまで福岡県の先輩教員が築いてきたもの、労力・時間・費用を考えると、動もすると縮小しても…となりがちですが、一旦停止してしまうと復活には相当な時間を要します。

長い間、様々な場面で無理なお願いも快く引き受けてくださりありがとうございました。これからの皆さんの活躍を心から願っています。さようなら。